

【あはれむに同じて、かはいがるといふほどの意である。【更に】この詞詞のかゝり方が、ちよつとわかりにくい。更には、またといふ意のものと、ちよつとも（下に打消のことは受ける）といふ意のものとあるが、どちらかちよつとわかりかぬ。しかしどうも、『やすく静なるをば願はず』にかゝつて、ちよつとも……願はないといふ意にいうてゐるらしい。まうすると、そのおき所をかしくなるが、これは、『はやくみあはれぶ』といふ句を起すのに、その接続がわるいので、その發語的の用をもかれて、そこにおいたものであらうと思ふ。前々から見られる通り、この作者は、その句の轉折する所のつなぎめに始終苦心して、發語的の接続詞（殆ど感歎詞のやうな趣の）を巧に用ゐなしてゐるのである。こゝもその爲に、かうした用ゐ方をしたのであらうと思はれる。

前段に世のたのみにするに足らぬのを述べたのを受けて、こゝに友と奴との上について、そのたのみにならぬ世態と、わが身の上の用意とを述べたのである。富めるにつき、れんころなるに趨り、恩愛の甚しく、あつきを顧み重んずるといふ世態をいひ、情あるとすぐなるを愛せず、やすく静なるをば願はぬといふ人情をなげき、

そこに絲竹花月を友とし、わが身を奴にするにはしかぬといふことを説いてゐるのである。

條理が極めて整然として、文章もまた理路が極めてきちんとしてゐる。そして、まても、『やすく静なる』といふ趣につかうといふ、作者の立場もよく見えてゐる。かういふのは、作者の最も得意とする所の境場であつたのである。

もしなすべき事あればすなはちおのづから身をつかふ。たゆみならずしもあらねど、人を従へ、人を顧みるよりはやすし。もしありくべき事あれば、みづから歩む。苦しといへども、馬鞍牛車と心を惱すには似ず。

【おのづから】自然といふ意で、今作者は自分一人であるから、自然、自分の身をつかふといふのであるが、しかしその自然といふ意は、ごく軽い。【たゆみならず】たゆみあらずの約。たゆしは、だるい意。【人を顧みる】人を世話する意。【やすし】そ

もしする事があれば、すなはち自分をつかふ。勞れてだるくないことはないが、人をつかひ人を見てやるのよりはらくである。もしあるべき事があれば、自分である。苦しいといつても、馬鞍牛車といつて、心をなやますほどではない。

(釋)

の心やすいのをいうたのである。【ありく】あるくに同じい。【馬鞍牛車と】『と』は、關係の助詞で、動作、状態のあらはれる範圍を定めて、抑へてその事物をさし示すに用ゐるものである。こゝでいへば、心を懈すといふ動作の範圍をきめて、その對象の事物である、馬鞍牛車を示してゐるのだ。それ馬に鞍をおけ、それ牛車の用意せよと、かう心を懈すやうの比ではない、心やすいといふのである。【似ず】は、一本には『しかず』とある。【なやます】いためくるしめる意。

前段の『たゞわが身をやつことするにはしかず』といふのを受けて、ひとりわが身を、われと役するの、甚だ心やすきをいうるのである。そして更に進んで、『ありくべき事あれば、みづから歩む』といふ上にまで及んでゐるのだ。『おのづから身をつかふ』といふことは、『みづから歩む』といふことと、兩々相對せしめて、すべて對句にして書いてゐるのが、ちよつと器用な句法であるといふ以外に、こゝには別に取り立てゝいふべきこともない。

(譯) 今自分の一身を分けて

今一身を分ちて、二つの用をなす。手のやつこ、足の乗物よ

二つの用をしてゐる。手の下べ、足の乗物、よく自分の心になうてゐる。心もまた身の苦みを知つてゐるから苦む時はやすめて、丈夫な時は使ふ。使ふからとて度々過ぎない。ものういからとて、心を動すことはない。まして況や常にあるき、常に動くのは、これ養生であらう。何ていたづらに休みをらうや。人を苦め、人を惱すのは、また罪業である。何て人の力をかりようや。

くわが心になへり。心また身の苦みを知れば苦む時はやすめつ、まめなる時は使ふ。つかふともたびたび過ぎず、ものうしとても心を動すことなし。いかに況や常にありき、常に動くは、これ養生なるべし。何ぞいたづらに休みをらむ。人を苦め人を惱すは、また罪業なり。いかゞ他の力をかるべき。

【二つの用】やつこと乗物との二つ用をさしたのだ。【やすめつ】のつは、連句法ではあるが、ちよつと接續の助詞のやうな(ての少しつまつた趣)はたらしきをもしてゐる。【まめなる】まじめの意から、ものうくない意になり、そしてからだ、手足などのすこやかに、ぢやうぶにあるにいふことばである。こゝもたつしやである、ぢやうぶである意。【ものうしとても心を動すことなし】『苦む時はやすめつ』を受けたので、心がすくはず、ものうしい時には、からだをやすめるので、聊か不自由な感じも

するが、しかし心を動して、その爲にいらするやうなこと（奴のいふことをきかぬやうな場合の）はないといふのである。これはちよつとさう見えなくて、或はからだを使ふのに気がすまぬことがあつて、その時にはたいぎに思はれてもないが、しかし心を動すまでにはないといふやうに説きたいかもしれぬが、さうではない。前にといた通りにとくべきのだ。それは、『まめなる』と『ものうし』とのそのかけあはせを見れば、ちやんとわかるのである。『養生』莊子の養生主篇に、『文惠君曰、善哉、吾聞三庖丁之言、得養生之焉』とあるのから出た語で、身心を存養することの意にいふことばである。『いたづらに』むだに、空しくの意。『罪業』業は佛敎語で、われわれの身、口、意の三つによつて作す所の行爲に名づけたものである。でそれには、善惡の二別があるのであるが、慣用上、多く惡の所爲の方にのみいはれる例である。『いかゞ』いかでに同じく、何としての意。

更にくはしく、前段に述べた所を説いたのである。『今一身を分ちて二つの用をなす』といふのは、ちよつとおもしろく、また『手のやつこ』、『足の乗物』は、奇抜な、おもしろい比喩の修辭である。しかしまたあまり書き過ぎてしまつた憾をのこして、

ゐる。『況や常にありき、常に動くは、これ養生なるべし』に至つては、道理はいかにもさることながら、あまりに理に落ちて、いたく讀者の感興をそぐ。『動く』は、一本には『はたらく』とある。『人を苦め、人を憐すは罪業なり』は、それほどもないが、同じく理に落ちておもしろくない。但し文章の調子はいふ『まめなる』と『ものうし』とのかけあはせの所など、ことに氣のきいた筆づかひである。

(譯)
衣食の類も、また同じことである。藤の衣、麻の夜具、得るに従つて肌をつみ、野べのつばな、峯の木の實、僅に命をつなぐばかりである。人に交際しないから、姿を恥ぢる悔もない。食物が乏しい

衣食のたぐひ、また同じ。藤の衣、麻のふすま、得るに従ひて肌をかくし、野べのつばな、峯の木の實、僅に命をつなぐばかりなり。人に交らざれば、姿を恥づる悔もなし。糧乏しければ、おろそかなれども、なほ味を甘くす。すべてかやうの事、楽しく富める人に對していふにはあらず、たゞわが身

ので、疎末であつても
それでも味をうまくす
る。すべてかういふ事
は楽しく富んでる人に
對していふのではな
い、たゞ自分の身一つ
に取つて、昔と今とを
くらべるだけである。

一つにとりて、昔と今とをたくらぶるばかりなり。

【藤の衣】藤の皮や葛などで織つた、そまつな布でこしらへた衣である。萬葉集に『鹽くむあまの藤衣』古今集に、『山田をもると藤衣』などあつて、あまや、山がつなどの著るそまつな著物をいふのだといふ。【ふすま】れる時に、身の上にかける、方形の夜具である。今のかけぶとんの如きもの。【得るに従ひて】得るがまゝに、すなはち別にたづね求めることをしないで、あるものでまにあはせて置くといふほどの意である。これは往生要集の卷四に、『産服といへども、肌をかくし、寒さをふせぐに足れり』とあるのを思ひ寄せて書いたのであらう。【野へのつばな、峯の木の實】前にあつた、『あるはつばなをぬき、いはなしをとる』(一四一頁)といふのに應じてゐるのである。【かて】食物である。【おろそかなり】そまつな意。【あまくす】うまくすといふほどの意。【たくらぶる】くらべる、比較する意。

こゝには更に、『衣食のたぐひ』にはひつて、その簡素の心やすさをといたのである。

一體、遁世者の簡素の生活にまかせるといふのは、すべて形の上の問題にはなれて、内容の上の充實を期しようといふのである。てきう一旦發心して、形のくだらない問題から離れた以上、もうそれをいひ説いたりする必要はないわけである。それがこの作者には、どうしてもさういかないのである。實際に簡素な生活にまかせてゐながら、しかもなほ形に囚われて、いろいろとその上をいうてゐる。だからともすると、それがよまひごとに聞えてしまふ。この段なども、まさにそれである。これはたがたびいうた通り、この作者の遁世が、そでない遁世であつた爲ではあるが、一つには、いたく形を氣にする作者の性格からの爲でもあつたらう。『姿を恥づる悔もなし』の一句は、その點からいうて、不用意の間に、いかにもよく作者のその性格を見せてゐるのだ。

作者もさすがに、氣がさすと見えて、『すべてかやうのこと、楽しく富める人に對していふにはあらず』とことわつてゐるが、それがよけいくどく聞えるのである。但し文章の調子は、例によつて、『僅に命をつなぐばかりなり』、『昔と今とをたくらぶるばかりなり』と相對して出してゐる所など、特にいゝ調子である。

(譯)
 總じて世を遁れ、身を捨て、から、恨もなく、おそれもない。命は天運にまかせて、惜まざいとほず、身をば浮雲になぞらへてたのまず未だしとない。一期の樂はうたゝねの枕の上にはきはまり、生涯の望は折々の美景にのこつてゐる。

おほかた世を遁れ、身を捨てしより、恨もなく、恐もなし、命は天運にまかせて、惜まざいとほず、身をば浮雲になぞらへて、たのまず、未だしとせず。一期の樂はうたゝねの枕の上にはきはまり、生涯の望は折々の美景にのこれり。

【おほかた】前に一五五頁に似たのと同じ用法である。【命】命は、天命といふあの命である。周易の繫辭に、『樂天知命、故不憂』とあるのがそれである。天命の解釋については、漢文では、いろいろやかましくいふが、命は令て(朱熹の解)、天の命するところといふ意からのことばである。そして天道、天理などいふ意に用ゐられ、またそれに人生の禍福吉凶を含ませてゐるのである。こゝもその禍福吉凶をこめていうたのだ。【身をば浮雲になぞらへて】維摩經の十喻に、『是身如浮雲、須臾變滅』とあり、千載集に、公任卿の歌の『定めなき身は浮雲にこそへつゝ、はてはそれにてなりはてぬべき』とあるなどから、思ひよせていうたのであらう。浮雲

は、ういてたゞようてゐる雲である。なずらふは、前にあつた通り、比する意である。【未だしとせず】未だしは、いまだしに同じで、まだ至らないにいふのである。それでこゝは、たのみにならぬとしないといふ意にといてゐる註書もあるが、さうではあるまい。たとひ自分の思ふやうにならぬことがあつても、それを未だしとくやまないで、そのまゝに満足するといふのであらうと思はれる。【一期】佛教語で、一生死間、すなはち生涯をさしていふことばである。但し時に、死期の意に用ゐられることもある。こゝは本義の生涯の意である。【うたゝねの枕の上にはきはまり】何の慾もなく何の望もないのをいうたので、いゝ心ちてうたゝねの興にまかせてゐる瞬間に、自分の樂は極る、これが無上の樂であるといふのである。これを諸註書に入生は夢の如しといふ意に解いてゐるのは、あまり考へ過ぎたとき方である。【生涯】莊子の養生主篇に、『吾生有涯、而知也無涯』とあるのから出たことばである。【折々】春夏秋冬のその折々をいうたのである。作者はこゝに、閑居の説のその結論に入らうといふのである。前數段の、とかくに談理に過ぎて、ともすると、讀者の感興をそがうとしたのとち

がつて、こゝに至つて、作者の筆は、その感興にのつて、實にいゝ調子に流れ出てゐる。従つてその感想の充實に伴ふ、その文章の調子も、極めて強い生趣を持してゐるのである。

『おほかた世を遁れ身を捨てしより恨もなく恐もなし。命は天運にまかせて、惜まざいとせず、身をば浮雲になすらへて、たのみず、まだしとせず』と、一氣にいひ下してきて、『一期の樂はうたゝねの枕の上にはまり、……』と轉折して、その優情にうちまかせた所は、何ともいへない、調子である。『うたゝねの枕の上にはまり』といふ修辭がことにいい。

われわれ讀者は、前段にしばしばどい談理を聞かされて、折々感興を中斷されたのであつたが、こゝに至つて、頓にそれを忘れて、さながらに、その作者の境界に引き入れてしまふ感じがするのである。蓋しこの一段が、この一篇のその頂點といふべきものであらう。

それ三界はたゞ心一つなり、心もし安からずば、牛馬七珍もよしなく、宮殿樓閣も望なし。今さびしき住居、一間の庵、みづからこれを愛す。おのづから都に出ては、乞食とされることを恥づといへども、歸りてこゝに居る時は、他の俗塵に著することをあはれぶ。

【三界】佛敎語で、欲界、色界、無色界をいふことばである。してその間に高下優劣の差は澤山にあるが、いづれもみな迷の境界で、われわれ人間の世界もこの境界の一部だといふのである。それでわれわれの世界を、おほよそに三界といふ用例である。こゝもそれで、われわれの世界を稱したのである。【たゞ心一つなり】華嚴經の十地論に、『三界唯一心、心外無別法』とあるのからいうたのである。尤もこれはよくいはれる語である。【七珍】前の二一頁に出てゐる。【よしなく】よるべない意で、しやうがない、實とすることができないといふほどの意だ。【一間の庵】古註書に

(譯) それ三界はたゞ心一つである。心がもし安くなくば、牛馬七珍も何にもならず、宮殿樓閣も望がない。今さびしい住居、一間の庵、自分でこれを愛してゐる。自然都へ出ては、乞食となつたことを恥ぢるけれど、歸つてこゝにゐる時は、世間の人たちが俗塵に執著してゐることを憐む。

は、『ひとまの庵』とよませてゐるが、音で『いつけん』とよんだのであらうと思ふ。尤も意味は、ひとまの意であらう。【おのづから】乞食となれるにかゝつてゐる副詞で、そして例の發語的の接續の用をしてゐるのだ。意味は、前に三七頁、一五五頁にあつたと同じで、求めてするのではないが、自然乞食となることもあるといふのないうたのである。【乞食】佛教にいふ頭陀つだの行ぎょうの中に、常行乞食といふのがあつて、諸の貪慾を離れる行の一つになつてゐるのである。がしかし、作者のこゝにいうてゐるのは、それほどまじめの意味の乞食ではないのであらう。一面には遁世者の行の形においてこれをなし、一面には食を得る爲にこれかなす流のものであらう。それ故、『恥づ』というてゐるのだ。【こゝに】こゝの方丈の庵をさしたのである。【他】のは、主格につく關係の助詞である。口語でいへば、人がといふ意だ。【著す】る】佛教語で、執著するの著すである。深くそのことに心を入れて、とりついてゐる意にいふことばである。

■前に感興に乗じて、閑居の趣の結論を述べたのを、こゝには更にうちかへして、道理の上からいうたのである。

『それ三界はたゞ心一つなり』といふのが、いふまでもなく、こゝでの主題である。作者のいはうとする所は、この一句の上に盡されてゐるのである。あとはその敷衍に過ぎぬ。しかもその敷衍は、又しても、やゝくどきに失してゐる。『……乞食となれることを恥づといへども』といふ恥づの一語は、どうしても形の氣になる、作者の氣質を、こゝにもおもはず見せて居るのである。

もし人、このいへる事を疑はゞ、魚鳥のありさまを見よ。魚は水に飽かず。魚にあらざれば、その心を知らず。鳥は林を願ふ。鳥にあらざれば、その心を知らず。閑居の氣味もまたかくの如し。住まずして誰かさとりむ。

■【このいへる事】方丈の庵についていうた、全體のことをさしたのである。【魚にあらざれば】莊子の秋水篇に、『子非魚、安知魚之樂』とあるのを、思ひよせて書

(譯)もしこのわしのいうてゐる事を疑ふのなら、魚や鳥のありさまを見よ。魚は水に飽きない。魚に飽かざれば、その心を知らず。鳥は林を願ふ。鳥に飽かざれば、その心を知らず。閑居の趣もまた、それに同じ

い。住まないて誰がさ
とることができよう。

内は...
きつとくは...
思ひのてある。

(譯)
そもそも一期の月影が
傾いて、餘算山のはに
近いといふべきほどで

いたものであらうか。【氣味】きもち、趣といふほどの意。

前段すでに閑居の趣と理とを説きつくして、こゝに更に、この一段をおいて、し
つかとこれを結び收めたのである。

『魚は水に飽かず』『鳥は林を願ふ』の比喻もおもしろく(論理の當否は別として)、し
て『住まずして誰かさたらむ』の断定もよくきいてゐる。前にもいうたことである
が、作者が實行したこの事實の前には、われわれはたしかにその權威を認めなけれ
ばならぬ。この断定の上には、またとかくの言葉を挿むことはできないのである。

『あもながら、われわれはその理をさうとうなづき得ながらも、そのまゝそこ
ゆかしい氣味にさそひ入れられることのできないのを、甚だもの足りなく
思ひのてある。』

そもそも一期の月影傾きて、餘算山のはに近し。忽に三途
のやみに向はむ時、何のわざをかかこたむとする。佛の人

を教へ給ふおもむきは、事にふれて執心なかれとなり。今
草の庵を愛するもとがとす。閑寂に著するも障なるべし。
いかゞ用なき樂をのべて、空しくあたら時を過さむ。

【二期の月影傾きて、餘算山のはに近し】月影の西の山のはに没せむとする比喻を

以て、わが身の年老いて、餘命のいくばくもなく、死期に瀕してゐるのをいうたの

である。一期は生涯の意。(一七二頁に出てゐる)餘算は、餘命の意である。菅雅規

の尙齒會の詩に、『眠思餘算涙先落』とある。【忽に三途のやみに向はむ時】忽に

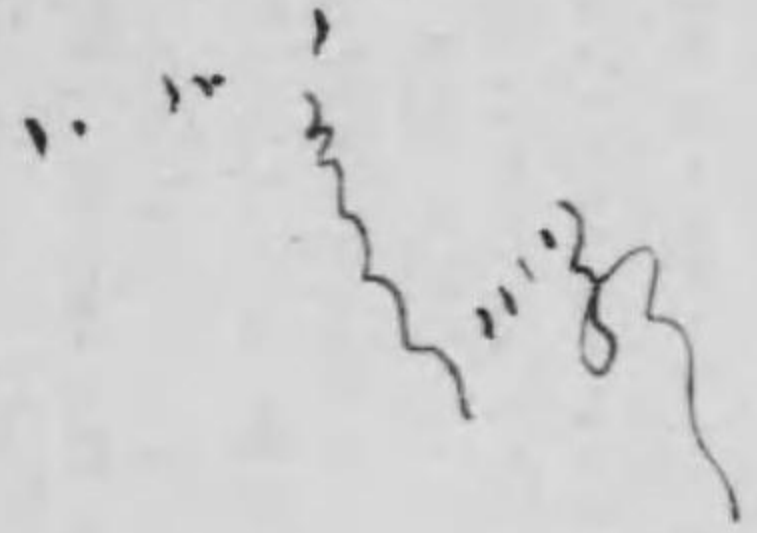
三途の間に向つていかなければならぬ時がくる、この時に當つて(もう死期のさう

近くに迫つてゐる今に當つて)といふやうな調子である。三途は、佛教にいふ、佛

果を得ざるものゝ死んでいくべき冥途の地獄、餓鬼、畜生の三惡道である。して惡

道である故に、やみといふたのである。【何のわざをかかこたむとする】かういふ
切迫の際に當つて、そもそも何事をなげきいはうとするのかと、前に閑居の趣につ
いて、類にことばをつひやしたのを、自から自分の心にとがめてゐるのである。わ

全然
雑かなるや
けなひの



さば「こと」といふほどの意である。かこつはなげく意。【おもむき】旨、趣旨の意。
 【執心】執著の心。(執著は前の二〇二頁に出てる) 【さばりなるべし】さばりは、いはゆる罪障つみしょうで、佛果菩提の悟境に到る障害たるべき、一切の罪業妄執をいふのである。
 【いかゞ】いかで、何としての意。【あたら時を過さむ】あたらは、惜しきの意。それで、半ば成歎詞的の副詞のやうな趣を以て、頭字的に用ゐられることばである。
 〔惜しき時〕といふと、いひ過ぎるやうになるが、ちよつとことばにあらはして解きににくいので、さう説いておいたのである。

譯 此れより以下は餘論である。餘論といふと語弊があるが、作者は前段において、この一篇を結び終へぬやうな氣がし、そしてまた、あまり閑居の趣をくどく説いたのに、聊か氣がさして、それで擱筆の便宜を得ようが爲に、こゝにかう『そもそも……』と、更に説き起したのであらう。
 しかしその説き起した所の調子はいゝのだが、あとはやはり談理に落ちてしまつてゐて、あまり擱筆の便宜の興をも引かないやうである。

欠

欠

の義、心中の垢はこれ煩惱、煩惱を除くは、自から清淨となる所以なりと思惟するや、忽然として大悟し、遂に阿羅漢果を成ぜり』と、それを作者自身の上に引いていうたのである。【貧賤の報の、みづからなやますか】諸註に、前世の因果によつて、現世に貧賤の報を得て苦むのかといふやうに説いてゐるが、なかしい。これは因果のむくいゝの意ではあるまい。貧賤であるが故に、その爲にみづから心をなやますのかといふ意であらうと思ふ。【妄心】妄念ともいふ。煩惱心の事である。【至りてくはせるか】煩惱心がおこり來つて、それて心をくるはせるのかとの意である。【更に前にあつた(一六四頁)ちつとも】の意。【舌根】舌の意に用ゐたもの。もと佛教ていふ六根(眼根、耳根、鼻根、舌根、身根、意根)の一で、根は強き作用を與へる義だといふが、そのまゝたゞ舌といふ意に用ゐられるのである。【不請の念佛】わかぬが、何の求むる所もなく、何の願ふ所もない念佛の意であらうかといふ。流水抄に『不請の字は、華嚴經第二十に出でたり』とあるが、どういふ意かは説いてゐない。一本には『不祥』また『不情』とあるが、それは意味のないあて字であらうと思ふ。又一本には『阿彌陀佛兩三返を』ともある。【建曆】順徳天皇の御代

の年號。「つこもり」月の三十日をいふ稱。【桑門】沙門（しやもん）と共に、梵語シユラマナの訛だといふ。勤息と譯す。出家して佛道を修めるもの、通稱であるのだ。

【蓮胤】作者の法名である。東鑑の卷十九に、「建曆元年辛未十一月十三日鴨社氏入菊太夫長明入道蓮胤、依「雅經朝臣之舉」此間下向、云々」と出てゐる。【月影はの歌】意は、月影はまことに結構であるが、しかしやがて山のはにかかれてしまふのがつらい、どうか絶えない、不斷の光を見たいものであるといふのである。がなは希求の意をあらす興感の助詞である。但しこの歌は、諸註のいう通り、新勅撰集の釋教の部に、「十二光佛の心をよみ侍りけるに、不斷光佛をよめる」といふはしがきのある源季廣の歌であつて、作者の歌ではない。そこで、諸註書は、その季廣は作者同時代の人であるからして、こゝに似つかはしい歌といふ所から、作者がかりてきて掲げたものであらうといつてゐるものもあるが、それはをかしい。この書が傳寫して傳つていく間に、何人か書き入れて、それがそのままに摺入してしまつたものに違ひない。でこの歌を省いてゐる本もあるのであるが、しばらく流布本の體にならつて、こゝに載せておいたのである。

餘論を更に進めて、漢文流の自問自答體にし、そして『その時、心更に答ふることなし。たゞ傍に舌根をやとひて、不請の念佛兩三返を申してやみぬ』と結んだ所は、ちよつと趣向である。『しづかなる曉』と、その背景を整へた所も、よく出てゐる。がどうもあまりきまり過ぎて、おもしろい結末でない。

ことに、『時に建曆二年三月の晦日のころ、桑門蓮胤これをしるす』は、あまりにきまり過ぎてゐる。冒頭の『行く川の流は』と、無造作に、軽く起し出した筆に對して、つりあはぬやうな感じがする。

てふと、これは終の歌が後人の摺入であるのによつて、それを押しひろめて、『住ま
ずして誰かさとりむ』までが本文で、『そもそも……』以下がすべて摺入か、——或
は『空しくあたら時を過さむ』で切つて、『しづかなる曉……』以下が摺入ではなから
うかと、かう考へ浮んだのであるが、たゞ、『しづかなる曉……』以下の文體が、や
や前の文體に似ぬといふ位のことだけで、さうはいひ切れぬやうである、して見る
と、やはり歌だけの摺入と見る外はないのである。

さうすると、どうもこの結末がおもしろくないといふ外はない。この書が長明の作

てなくて、後人が諸書の一部を訂復補綴して作りなした偽書だといふ疑を挿まれるのは、この結末の一段が、大にその責を負ふべきものであらうと思ふ。

方丈記評釋終

方丈記評釋

定價金壹圓

大正十五年六月廿五日
大正十五年七月十五日
大正十三年七月十五日
印發行
增發行
訂發行
刷行

著者 内海弘藏

發行者 三樹一平
東京市神田區錦町一丁目十番地

印刷者 武居菊藏
東京市本郷區眞砂町三十六番地

印刷所 日東印刷株式會社
東京市本郷區眞砂町三十六番地



發行所

東京市神田區錦町一丁目
九番

株式會社 明治書院

電話半區七二〇四番

著生先藏弘海内 士學文

徒然草評釋

三六版布裝全一冊
定價金壹圓五拾錢
送木料金拾錢

中等學校の上級生で徒然草を讀まないものはなく、徒然草を讀む程のもので、この内海先生の『徒然草評釋』を讀まないものは殆どあるまい。この書がかくまで大歡迎を受けたのは、全く其解釋の丁寧親切で、よく其文意を明かにし、且つ作者兼好法師の精神を詳かにせる等、他に類のない特色があるからであらう。

徒然草詳解

四六判布裝全一冊
定價金貳圓貳拾錢
送木料金拾貳錢

『徒然草評釋』よりも更に進んで深く研究せんとする人々の爲に最も詳細なる解釋を施し、且つ全部の口譯を加へられたるもの、眞に徒然草註釋書中の權威である。

~~徒然草~~

徒然草
評釋

357
1561

終

